

（令和5年度第1回河川工作物AP会議における資料4-1から）

### 羅臼町のルサ川における河川改修の方向性について

羅臼町の国立公園及び世界自然遺産地域内に位置するルサ川は、河口部の道道が通過する知床橋以外には河川横断工作物がなく、かつその流域には人の生活圏が全くない知床でも稀な河川である。

河口に近い知床橋の上流部は、以前サケマスの稚魚の畜養のために河床が改変された経緯があり、畜養のために掘削されて出来た二本目の流れが形成されている。また知床橋近くの左岸側の一部がコンクリート護岸されており、その護岸の内側が洗堀されているため、その洗堀の進行を防ぐための大型土嚢が応急的に置かれている。

また、右岸側一帯はかつて工事用残土置き場として利用されていたが、現在は環境省所管地となっており、「ルサフィールドハウス」が環境省によって設置されている。

今後、環境省所管地における園地整備が計画されており歩道や観察施設、親水機能を持つ施設などが候補に挙がっている。

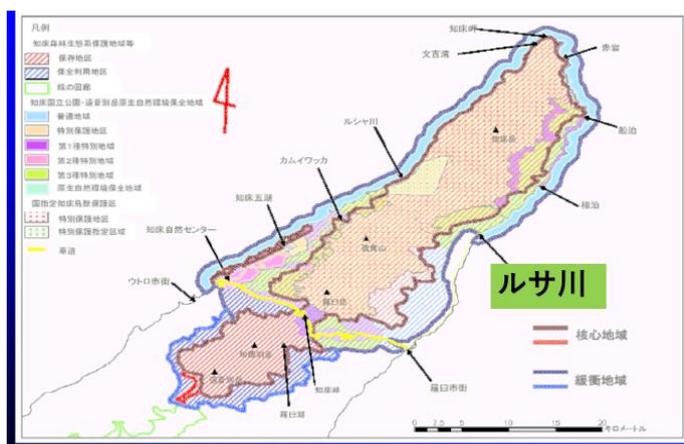
ルサ川の河川管理者は羅臼町であり、左岸側の洗堀の大型土嚢による応急手当は町が実施しているが、この洗堀に対応する自然環境に配慮した恒久的な手当は、以前からの羅臼町の課題であった。

今回環境省の園地整備が計画されるにあたって、所管地が河川敷に及んでいる部分もあったため、事前に環境省との調整がなされ、必要な河川の改修については羅臼町が実施し、所管地からの河川までのアプローチ及び親水機能を持つ施設の整備は、環境省が実施することになった。

羅臼町はこの機会をルサ川の根本的な改修を実施する絶好の機会ととらえており、環境省と連携して河川敷と隣接する所管地の園地整備と合わせて、ルサ川の河川環境や魚類の生息・繁殖環境を極力損なわずに、出来得る限り自然素材を活用して左岸側の浸食を抑えるための河川改修を実施したいと考えている。

ルサ川流域はサケマスが遡上して自然産卵し、それを目当てにヒグマや大型猛禽類が集まるなど、知床の中でも原生的自然環境が色濃く残る区域である。よって河川改修にあたっては、現状で形成されているサケマスを含む野生生物の生息・繁殖環境を可能な限り保全しながら施工していきたい。

また、右岸側の園地整備と同時に河川改修を実施することについては、両事業の相乗効果を得るまたとない機会である。環境省との調整を今後も継続していき、改修による河川の変化はもちろんのこと、両事業の整合性や安全性、親水性に充分配慮しながら進めていきたい。



（令和6年度第2回河川工作物AP会議における資料13から）

## ルサ川における河川改修について

羅臼町役場産業創生課

- ・令和5年（2023年）1月28日開催の令和4年度第2回河川工作物アドバイザー会議において、ルサ川の「河川改修の方向性について」の説明をした。
- ・令和5年（2023年）7月18日、現地確認及び令和5年度第1回河川工作物会議において、再度「河川改修の方向性について」の再確認をし、①左岸側の浸食を可能な限り自然の材料を使って抑える。②現状で形成されているサケやその他生物の生息・繁殖環境を可能な限り保全する。③右岸側で環境省が整備する園地とのつながり、整合性、安全性、親水性に配慮して実施することの3点を確認した。また現地を見てもらった上で、平面図、横断図、木杭バープ図を提示して、委員のご意見をいただいた。
- ・令和6年（2024年）1月から2月にかけて、第1回目の改修工事を実施し、令和6年12月から令和7年2月にかけて2回目の改修工事を実施した。いずれも実施に当たっては、事前にシマフクロウ保護増殖検討会の山本純郎委員にシマフクロウへの影響を確認した上で、国立公園特別地域内における土地の形状変更許可を環境省から得ている。また、施工時期については、羅臼漁業協同組合などと協議して、サケマスの遡上時期やシマフクロウへの影響の少ない時期に設定している。
- ・この2回の改修工事で当初予定していた施工と、委員各位のご意見のうち反映できる要素は反映させたつもりではあるが、最初の改修工事後から現在に至るまでに、目立った河川の増水が無かったことから、バープ工法の効果を確認できずにいる。  
今後増水が発生して修正が必要となった場合に備えて、来年度も若干の予算は用意しているが、施工の効果を確認できない状況が続いた場合には、数年のモニタリングが必要となる可能性もある。
- ・上記2回の改修工事は、羅臼町役場が地元業者と契約を結び実施し、いずれも（株）北海道技術コンサルタントのシステムデザイン室アドバイザー技師長である岩瀬晴夫氏の技術指導のもとに施工した。